

for Better Sound Creation

よりよき音色を求めて

話題となったソロアルバム「リアルブルー」、そして作・編曲から演奏まで幅広く才能を開花させた「侍プラス」の好発進（すでに二枚がリリース済み）、全日本吹奏楽コンクール課題曲にも入選など、このところ注目を浴びている新世代トランペッター＆コンポーザー、三澤慶氏。初BSCの感想は？

見ていて気持ちいい楽器ですね！

「ピストンの感触がすごくいい。まず触ってみて感じたのがそういうことです。ええ、吹く前に、です」

そう語るのは、三澤慶氏。冒頭にご紹介したように、ソロに作曲に、と、幅広い活躍を見せる「新世代」型トランペッターのひとりである。クラシックを基本にした「親しみやすくさわやかな味わい」というものが、本誌の見るどころでは氏の手がけた作品のどれにも共通している、と思われる。そのあたりを評して、本誌では「新世代」と位置づけたいのだ。ジャズやポップスの分野ではともかく、クラシックテイストを基本にしたこの種の「立ち位置」は珍しい。プロデューサーによって「クリアジャズ」と命名されたアルバム「リアルブルー」には、一聴してわかる氏独自のさわやかな世界が充溢している。三澤節、とでも呼ぶべきものがあるのだ。それは先述の「侍プラス」でも同様で、そこでは最近進境著しい「作曲家」中川英二郎氏らの作品群と好対照をなしている。

そんな氏に、これまた業界的には「新世代」型（つまり、日本人が外国で修業して



取材は東京・新大久保「山野楽器ウインドクルー」にて。この日は三澤氏、BSC初体験。しかも最後には試作品まで…

独立開業、そして「輸入品」という形で凱旋した、という初のケースとしての「新世代」である)というところが共通している。BSCのトランペットを試奏していただいた。その第一印象が、冒頭に引用した言葉である。

「いい楽器は、見ていて気持ちがいいですね。造りがいい、というのは第二抜き差し管を抜いて、中をのぞいてみても感じられるところで」

ここでピストンとヴァルヴケーシングの「ずれ」を確認するマニアは多い。

「もちろんこれらは見掛け上の話ですから、吹いてみないとなんともいえませんがね…」

とあって、吹いてみることも数時間。あらためて感想をお聞きしてみた。

「やはり、見た目通りの印象ですね。しっかり造られている。見た目はほとんど一緒なのに、確実に吹いた感じが違うんです。105S、106S、206S、303Sの4種類を吹かせていただいて、好きな順に並べてみたのですが…」

好みと価格は比例するのだろうか？確認してみると、やはり105Sと303Sはきちんと両端に並んでいた。まんなかの106Sと206Sでは、三澤氏の評価では106Sの方がお好みに合うようだ。

「もっと時間をかけて試したい、というのが本音です。106Sと206Sではどこがどう違うんですか？」

206Sは愛称を「オールラウンド」といって、見た目では他のモデルに比べてやや

We are Brass Sound Cats!

「ひと目見て惚れました」「ね！」



当日は105S、106S、206S、303Sを試奏。好きな調に並べてもらうと、最終的には303Sがお気に入り

ベルの根元側を絞り、ベルの開きの度合いを変えている。

「そのせいか、音が直線的に飛んでいく感じがします（吹いてみて）。ね？これはメロディをくっきり浮き立たせる、つまりラインをだしやすい設計がほどこされているんでしょうね」

106Sの愛称は「ニューヨーク」。アメリカンブラスの原点といわれる伝説的モデルのイメージが、設計思想の「通奏低音」に流れている、と、マニアから評判の楽器だ。そして三澤氏が最終的に気に入ったのは、やはり303S「シンフォニー」。

「名前は「シンフォニー」ですが、室内楽でもアンサンブルでも使いやすいですよ。BSCはベルがやや小さめで、さまざまな繊細さを要求される現場でも使いやすいと思います。マウスピースレシーバーが短いのは、ベルとのバランスをとっているのでしょうか。ベルの「背骨」も重要なファクターのはず。楽器が好きなら人には、たまたまない魅力のある楽器ですね…」

三澤氏にとっては、初対面ながら単に「新製品紹介」だけで通り過ぎるには惜しかったようだ。さらに、たまたまそこにあったC管の試作品も吹いて、ますます興味津々。なんとこのC管のスタイルは、これまでにないものなんです。ところが…おっと、もうスペースがない！（続く）



左の土屋氏は105S、右の橋本氏は106Sを採用。ともにMBSで活躍する楽器師だ

今回のCATSは、複数形（Sに注目）。文字どおりお二人のBSCファンが登場。なんとお二人とも、カタログや雑誌でBSCのスタイルを見てピン！ときたのだそうだ。

「本誌で先頃、姫路の方で501Gをカタログだけで買った、という方をご紹介されたでしょう？それを見たときに、ああ、やはり同じような方がいらっしゃるんだなあ、と思いました」

そう微笑む橋本孝夫さんは、昭和28年生まれのエテラントランペッター…だけではなく、その昔はチュービストでもありまたアルトサクソ吹きでもあり、そして今はビッグバンドの喇叭（らっぱ）吹きにして電子鍵盤楽器関係のメンテナンス技術者でもあり、さらに社長業もつとめる、という、文字通り八面六臂の大活躍を見せるエネルギーがすごい（みかけは本当におだやかな方なのです）オトコなのである。

「普通は吹いてみて考えるものですよ…でもこの楽器（氏は106S「ニューヨーク」を購入）の場合、吹かなくてもなぜかその「良さ」が直感できたんです。他の楽器とは、ひと味が全然違いますよ」

そんな橋本さんの現在の「主戦場」は、千葉を拠点に精力的な活動を展開しているアマチュアバンド「MDS」。習志野で古くから活動していたライトミュージックソサエティから分離独立してスタートしたこのバンド、名前の意味は「ミュージックドリンカーズソサエティ」の略、とのこと。要するに「音楽のんべえ集団」ということですよ、と笑う橋本氏のMDSでの仲間が、BSC仲間にもなった。その名を土屋行宏さんとおっしゃる、こちらは真正正純トランペット命のナイスミドル。現在はMDSの他にも市原ガリスターなど、いくつかのバンドで活躍している。

「もともと吹奏楽をやっていたのですが、たまたまヒトが足りないので応援にかりだされたらビッグバンド

が面白くなっちゃって（笑）」

今はすっかり吹奏楽から足を洗って、この道一筋だそうだ。

「楽器にはかなりこだわってきたつもりです。自分が気になるような部分はいろいろ改造までしちゃったり（笑）」

どちらも技術者肌のお二人。だからこそ、最初にBSCを見たときに、「背骨」のあるベルU字管や、独特のフィッシュテール（指かけフックなどにまがれているゴム状のもの。先端が魚のしっぽのようになっていることからそう呼ばれるが、音響的に意味のある形状だとのこと）など、すごく研究を重ねた結果のフォルムに、

「一目ぼれしちゃったんですね」

土屋氏も橋本氏同様、実際に吹く前にすでに購入を決意したのだが、土屋氏はたまたまBSCのモデルが一本だけ南船橋の島村楽器においてあるという情報をキャッチ。お店に無理を言って用意できるだけのBSC製品を同店に送ってもらい、橋本氏を誘って試奏することに。

「残念ながらそのとき501Gは無かったです」（土屋）。

試奏した二人が驚いたのは、どれも同じような見かけなのに聞かず、それぞれに「良さ」があるということ。見た目は似ていてもそれぞれに性格の違いがあり、また低価格モデルでも品質の高さは上級モデルと比べて遜色がない、ということに驚いたのだ。

「それぞれ性格の違いは感じるが、価格差＝品質の差、という感じはしなかったですね」

と異口同音にその時の印象を語る。

「これならもっと高くても売れるよ、と余計なことを進言したりしました（苦笑）」

結局、最初は303S購入を考えていた土屋氏は、最後まで迷ったがビッグバンドでリードを吹く機会もあり105Sのやや軽快なイメージを優先することに決定。「手ごころ感だけで決めただけではありません。逆に105Sはあまりに安いので、それが不安でした」

橋本氏はそれよりわずかに遅く、輸入されたばかりの106Sを「試奏なし」で購入。すばり「アタリでした！」とにっこり。

同じバンドのメンバーはお二人よりお年上ながら、リードもソロもバリバリこなす猛者だという。そんな「先輩」たちも、「若手」のBSCには注目をしている、という。

「喇叭人生は、これから楽しくなりそうです。BSCなら、じっくりつきあえそうですからね」